
13 . それから

フランシス・ローレイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

13 . それから

【Nコード】

N4331T

【作者名】

フランスス・ローレライ

【あらすじ】

翌年の春、イサムは銀座でマミを見つける。

その半年後、2002年春のことである。

イサムは休暇をとり、チリのサンティアゴから帰国中だった。

その日の夕方、彼は銀座プラントان前の交差点で、信号待ちしていた。

そこに見たことのある女性が、ヴァイオリンのケースを抱えて通りかかったのだ。

「あ、津軽マミだ！」

背格好と言い、目鼻立ちと言い……そして、ヴァイオリンのケースに太く黄色いテープで貼ってあるMとTの大文字。

赤信号で、彼女が立ち止まる。駆け寄って彼女の肩をたたきながら、「津軽さん！」と声をかけると、彼女は少し不快そうにイサムを見た。

しかし、みるみるうちに驚きを表した。

「やっぱりマミだね！」

彼はもう、喜色満面だった。

彼女は髪が少し短くなり、化粧が心持ち濃くなっていたが、あの特徴的な灰色の瞳はそのままだった。

「国谷さん？」

彼女の声は、そこまで変わっていない。

「そう！」と答える彼は、胸がドキドキしている。

「どうして？」

「今、休暇でチリから帰国していてね……」

「へえ……」と言いながら、彼女はイサムの頭のとっぺんから、足の先まで一瞥した。

「少しやせたね、あの頃と比べると……」

「そう？ マミちゃんは、どうしてるの？」

「相変わらず、アウガルテンで弾いているわよ」

「じゃあ、休暇中？」

「実は、アメリカで大規模テロ事件も起きたし、結婚することにしたの」と、ためらいがちに彼女が言った。

「えっ、誰と？」

「あなたの、知らない人だと言いたいけど…… フィッツシユマン先生……」

「えっ、信じられない！ おめでとう！」と叫ぶイサムは、ほとんど、狂わんばかりだった。

「ありがとう」と答える彼女の眼には、涙が浮かんでいるようだ。

「拳式は、いつ？」

「一週間後……」

「東京で？」

「そう」

「へえ…… 大変だね。全然知らなかった…… 確かに、あのテロ事件は、ショックだったね……」と、イサムが声を震わせながら言った。

「……」
信号が、青に。

「今、時間ある？」と言いながら、イサムはあわててマミに名刺を一枚渡した。

「私、急いでいるの。ウィーンから戻ったばかりで……」と言いながら彼女は、信号の点滅を見ながら横断歩道を渡りはじめた。

その時だった！ 突然、どこからともなくバイクが突っ込んできた。

そして、彼女の鋭い悲鳴。

バイクがゴォーッと、すごい勢いで走り去った。

「大丈夫か！？」

返事はない。彼女はそこに倒れ、足から血を流している。イサムは彼女の肩を抱き、上半身を支えようとした。通行人が集まってくる。

「ヴァイオリン、ヴァイオリン……」と、彼女は懸命に楽器を探し

ている。

「救急車を呼んで下さい！」と、彼が叫んだ。

「大丈夫よ」と気丈な彼女が口走る。

こんなことって、ありうるのだろうか、東京も銀座のと真ん中で！
近くの交番から警察官が駆け寄り、間もなく救急車が来た。彼女が担架で運ばれていく側をイサムが小走りについていく。そして一緒に救急車に乗ってしまう。

サイレンを鳴らしながら走る救急車の中で、マミはくやしがつていた。

「ひどい、ひどい……」

「ヴァイオリン目的の当て逃げですね」と、救急隊員が彼女の足に応急措置を施しながらつぶやく。

結局、彼女は入院せざるを得なかった。

足の治療と共に、しばらくの安静が必要となり、彼女の結婚式は、やむなく延期となるらしい。

イサムは、次の日、マミの見舞いに出かけた。

あの時、自分から銀座の交差点で声をかけなかったら、彼女はこんな目に遭わないで済んだのでは、との自責の念が働くのだ。

女性ばかりの4人部屋で、さすがのイサムも気を遣ってしまう雰
囲気だった。

「調子は、どう？ 花を、持ってきたよ」

「どうも、有難う。すごく、綺麗」

「意外と、元気そうじゃない？」と、ベッドの前の椅子に腰かけながら、イサムが言った。

「まあね……そう言えば、ニューヨークの藤江良子から、連絡ある？」

「いや、ないけど……」と言う彼は、及び腰であった。

「無事だと、良いわね」

「新聞の犠牲者名簿には、いなかったけどね」と、彼が言い放つ。

「行方不明？」と、彼女が問いかける。

「分らない」

半年前の9月11日、ニューヨークの世界貿易センターで起きたあの震撼とするテロ事件のおかげで、世の中が確かに変わりつつあった。

約3000人もオフィス・ワーカーが亡くなり、藤江良子とはその頃から音信不通だった。その後間もなく、アフガンでテロリスト集団の掃討作戦が始まっていた。

「私：オーディションで聞いた話：でも当時は、信じられなくて……」と言うマミは、あたかも自分のせいで彼女が行方不明、と言わんばかりだった。

「彼女には、ちゃんと伝えただけだね。メールで『9月11日には、世界貿易センターに近づかない方が良さ』と、夢の警告を伝えただ。きつと助かっていて……ショックで現れないだけだろう」と言つて、彼はマミを安心させようとする。

「でも、心配なの……何となく」

そして入院3日目の夕方、再び見舞いに来ていたイサムが、病室のマミに別れを告げて病院の中庭に出てくると、はたして、そこに藤江良子がいるではないか！

あつ、彼女、マミの見舞いに？

彼は、ドキドキと高鳴る胸の鼓動を感じながら、大声で

「藤江さん！」と、呼びかけた。

「あら、国谷君？」と、藤江良子はすぐに反応してくれた。

「無事だったんだね！ 心配したよ」と言いながら、イサムは、ほつと胸をなでおろす。

「偶然、命拾いしたの……念のため休暇を取ったら、助かったのよ！ でも、同僚や仲間が……」と言いながら、彼女はうつむいてしまう。

「そうだったね……」と答えるイサムの脳裏には、ニューヨークで、

双子のような二棟のビルに旅客機が次々と突っ込んでいく、半年前の恐ろしいシーンがよみがえる。

「そう言えば、気をつけてって、メールでウォーニングをいただいた？ どうして、あんなことが分かったの？」と、疲れきった表情で彼女が答える。

「9月9日に、夢を見たんだ。警告する奴が現れて……」

「どうも有難う！ 命の恩人よ！ でもまさか国谷君、犯行グループじゃないわよねえ？」

「俺は、関係ないよ」と彼が、吐き捨てるように言った。

「私にあんなウォーニングをくれたの、国谷君だけよ」

「そもそも、俺の夢だしな……」と、彼が身震いしながら答える。

「私はおかげで、命拾い！ あの日、職場界限から離れていたの」

「へえ……信じられない！ もう、会えないのかと思った！」と言いながら、彼は涙ぐんだ。

「でも、知り合いにとにかく、犠牲者が多すぎて……」

「今日は、マミの見舞いに？」と、彼が尋ねた。

彼女は、青白く顔をゆがめながら言った。

「貴方の警告、結局、皆に伝えるべきだったの。でも、あの時は、とても信じられなくて……」

「とにかく、時間が、なかったんだよ。マミなんか、結婚式が延期で……」と、彼が応える。

「えっ、何それ？」と言いながら、彼女が驚いた表情を浮かべた。

「拳式まじかだったのに、この災難で……」

「そんな話、知らない。誰と？」

「フィッシュマン先生って言う、彼女の元指導教官。ウィーンの……」

「本当かなあ、それ……」と彼女は、疑い深そうに言った。

「だと言う、話だけだね」と、彼が無然として答えた。

「少し、嘘くさくない？ イサム君、煙にまかれたのよ」

「どうして、そう思うの？」

すると辺りが突然暗くなり、強く風が吹いたかと思うと、藤江良子は何やら、揺らいだかのように見えた。

「あれから、たったの半年で、本当にゴールインすると、思う？それよりマミは、まさかニューヨークで大規模テロが起きると思わず、私には嫉妬したのか、事前に何も、教えてくれなかったの。そうしたら……でも私は、ボストンの病院にいるから、心配しないで……」と、唸るような低い声で、彼女がつぶやいた。

そして彼女は、見る見るうちに肉体的な存在を失い、希薄で半透明な三次元ホログラムのようなものに変わっていった。

それが、足先から上半身に向かって、徐々に消えていくのではないか！

「い、生霊……！」と口走るイサムは、顔面蒼白だった。

そして彼女の姿は、あとかたもなく消えてしまった。

（完）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4331t/>

13．それから

2011年8月6日03時32分発行